

第二章 「黄金家族」の歴史としての編年史

第二章では、16世紀後半にチベット仏教であるゲルク派ラマ教がモンゴルのオールドス・トゥメンを支配するアルタン・ハーンによってモンゴルに導入されたあと、モンゴルにいかなる変化をもたらしたか。そして、17世紀に編纂された「四部の黄金史」に反映されたモンゴル帝王の系図、いわゆる「黄金家族」の観念にいかに関し、ラマ教的意味が再投入されていったのかを見ていきたい。

第一節では、論を展開する最初の作業として、「黄金史」と呼ばれた四部の編年史の研究状況、内容を取り上げ、関連する情報を提示することにする。

第二節では、「黄金家族＝ブッダの合一」という編年史における歴史記述の思想的前提を見ることにする。チベット仏教の影響を受け17世紀モンゴル編年史における「黄金家族」概念は大きく変容する。ブッダの「黄金家族」とチンギス・ハーンの「黄金家族」の系譜的合一が編年史の著者たちの歴史編纂に対する根本姿勢であった。そして、「黄金家族」概念の変容は、編年史でなされた「黄金家族」に対するラマ教的意味の再投入の作業によるものである。

第三節では、編年史の歴史記述の方法について考察することにする。チベット仏教の影響を受け、17世紀モンゴルの編年史における歴史記述は13世紀の『モンゴル秘史』と比べて大きな変化を表わしたが、声の文化に基づく記述方式は根強く残った。このことは、編年史が「読むための歴史ではなく、聞くための歴史である」という遊牧国家＝「行国」の歴史の特徴を持っているということである。

第一節、四部の編年史

第一章では、本論で扱う四部の編年史の基本情報を簡単に提示したが、ここでは内容、構成について詳しくみていきたい。繰り返しになるが、これらの編年史

は、

- 一、 17 世紀の初頭に編纂された、著者不明『アルタン・トブチ』（[altan tobči]）：フルタイトルは、『モンゴルのハンたちの根源を簡略にまとめあげた黄金の概要』（[mongγol-un qad-un ündüsün quriyangγui altan tvbči]）である。本研究では、1915 年の北京版を扱うのである。また、本研究では、四にあげているロブサンダンジン（[bLo bzanaṅ bsatan 'jin]）の『アルタン・トブチ』と区別し、混乱を避けるために、小林高四郎に従って『蒙古黄金史』とする。
- 二、 1662 年に編纂されたサガン・セチェン・ホンタイジ（[Saγang sečen]）の『蒙古源流』（[erdeni-yin tobči]）：フルタイトルは、『ハン等の根源の宝石の概要』（[Qad-un ündüsü-ü Erdeni-yin tobči]）である。本論文では、内モンゴルの学者メレゲンバートル（墨尔根巴图尔）が 1962 年に出版した、内モンゴル自治区・アラシャン盟アラグソウルデ（[Aragsuolde]）で発見された版本を用いる。また、『四庫全書』に収録された漢語版も参照することにする。本論では、『蒙古源流』と略す。
- 三、 著者不明の『シャラ・トージ』（[sira tuγuji]）：フルタイトルは『古のモンゴ 1581 ルのハン等の根源・大黃史』（[Erten-ü mongγol-un ündüsün-ü Yeke sira tuγuji orosiba]）である。これは、1630 年代に書かれたとされている¹。本論では、『シャラ・トージ』という呼び方に統一する。
- 四、 ロブサンダンジン（[bLo bzanaṅ bsatan 'jin]）の『黄金史』（[altan tobči]）：フルタイトルは、『古のハン等を根源とする政治の由の著作を簡略に集めた黄金の概要というもの』（[Erten-ü qad-un ündüsülegsən törö yosun-u jokiyal-i tobčilan quriyaγsan altan tvbči kemekü orosibai]）である。書かれた年代については諸説あるが、17 世紀後半に書かれたという説が有力である²。本研究では、モンゴル国の学者 SH・ビラーが 1990

年に出版した写真版を利用するのである。本論では、『アルタン・トブチ』、
場合によってはロ『アルタン・トブチ』と呼ぶことにする。

の四つである。

1-1 著者不明『蒙古黄金史』

著者不明の『モンゴルのハンたちの根源を簡略にまとめあげた黄金の概要』は、
小林高四郎によって、『アルタン・トブチ（蒙古年代記）』と訳され、訳注を付
けて、昭和14年（1939年）に、外務省調査部第三課から出版され、昭和16年（1941
年）には、『蒙古黄金史—蒙古民族の古典』と題して、生活社より再版された。
また『アルタン・トブチ』の「喀喇沁本蒙古源流」と呼ばれる写本が藤岡勝二に
よってローマ字に転写され、一部に日本語訳をつけて、氏の死後に東京文求堂よ
り出版された。この写本は、サナン・セチェン・ホンタイジが著した『蒙古源流』
の一部を『蒙古黄金史』の内容と合体させたものであるとみられている。

『蒙古黄金史』は四種五つの版本が出版、公刊されている。最初に公刊された
のは、ボリヤート共和国のラマ僧ガルサン・ゴムボエフ（Г о м б о е в
Г а л с а н 1822-63）が1858年にサンクトペテルブルグで出版した『蒙古黄金
史』で、「ゴムボエフ本」と呼ばれている。「ゴムボエフ本」のモンゴル語原本
の書き写しも、ゴムボエフのロシア語翻訳もウラジミルツォフから非常に低い評
判を受けた。

また、北京の蒙古書社から1915年と1927年に出版された二つの版本があり、
「北京Ⅰ」、「北京Ⅱ」と呼ばれるものである。「北京Ⅰ」本は、1915年に内モ
ンゴルのハラチン右旗出身のボヤンビリグト（[buyanbiligtü]中国名は汪国鈞）
が出版したものである。ボヤンビリグトは、ハラチン旗の協理塔布囊（[tusalayči
tabunang]協理は官職名で、タブナン（塔布囊）はチンギス・ハーンの一
族の婿の後裔であることを示す身分である）の助けを得て、『聖チンギス・ハーン経』

([buɣda činggis qaɣan-u sudar]) と題された写本を手に入れ、『モンゴル秘史』、『蒙古源流』を参照して編集し出版した。出版当時の題名は『聖チンギス・ハーン伝』であり、「ハラチン本」とも呼ばれる。1927年にボヤンビリグトの学生であるテメゲトゥ ([temgetü] 中国名は汪瀋昌である) が「北京Ⅰ」に校訂を加えて『 [buɣda činggis-ün čadiɣ] 』 (『聖チンギス・ハーン伝』) という題名で出版したのは「北京Ⅱ」と呼ばれる版本である。小林高四郎の和訳『蒙古黄金史』は、「北京Ⅱ」本を用いている。

小林高四郎は『蒙古黄金史』について、「とにかく宮廷の実録たる「秘史」に次ぎ、「源流」の先駆（藍本）をなす点において貴重な文献である」と評し、その書かれた年代と著者については、「恐らく十七世紀初葉の学識ある内蒙古の喇嘛であったことは推測しうる」（小林高四郎 1939、p1-2）としている。『蒙古黄金史』の著者については、学者たちはラマ僧の手によるものであるという点で基本的に一致しているが、編纂された年代については諸説が林立している。ゴムボエフ本の序文で提示されたソビエリエフ (совелиев) の 1604 年説に異議を唱えた小林高四郎は、ルイ・リゲチ (louis ligeti) の研究を踏まえ、『蒙古黄金史』に記録された明朝皇帝の系譜が天啓帝 (在位 1620-27) まで記録されていることを手掛かりに、1630 年前後に書かれたとしている (小林高四郎 1939、p2)。一方、モンゴル国の学者プルライ (Г.Пэрлай) も、1604 年に書かれたとする立場をとっている。『蒙古黄金史』の最後の一節は、リグダン・ホトクト・ハーンの即位 (1604 年)、アルタン・ハーンの孫であるスメル・タイジが第四世ダライ・ラマに認定されラサに向かったこと (1602 年)、そして、そのかわりにマイダリ・ホトクト法王がモンゴルに着き、「六大国に広まったツォンカワの教えを更に隆盛させた」 (『蒙古黄金史』 p107) こと (1604 年) など 17 世紀初頭の一連の出来事を記録して終わっている。そのため、リグダン・ホトクト・ハーン即位後、間もなく編纂されたと主張されている。さらに 17 世紀後半に書かれたという説もある

が、1669年（清の康熙8年）に親王に封じられた「チャハル家ブルニ親王」の名前が登場していることのみに基づくこの説は根拠があまりに弱い。17世紀後半の説について、森川哲雄はテキスト原本について研究した結果、「チャハル家ブルニ親王」の記述が「北京Ⅰ」、「北京Ⅱ」にしか見られず、かつ「きわめて不自然な個所に挿入されている」ことから後の人により書き加えられたものと推定している（森川哲雄 2007、p153）。

諸説を概観する限り、1604年、1630年前後説が有力であると思われるが、『蒙古黄金史』には、1620年代に起きたリグダン・ホトクト・ハーンと後金（満州）との軍事衝突について触れられていない。リグダン・ハーンと後金国の間で起きた軍事衝突の結果、モンゴルは独立国家から大清国の支配下に編入されることになる。『蒙古黄金史』が1630年前後に書かれたとすれば、この事件が少なくとも反映されるはずである。しかし、これについてまったく触れていないことから、1604年前後という説が最も有力であると考えられる。

『蒙古黄金史』の主な内容は「黄金家族」の歴史と、モンゴルにおける仏教導入の歴史の二つの視点から三つの部分に分けることができる。「黄金家族」の歴史を中心に分けると以下のようなになる。

- 一、 インド・チベットからチンギス・ハーンにいたる「黄金家族」の起源。
- 二、 オゴディ・ハーンから大元オルス崩壊までのハーンたちの称号と在位年数。
- 三、 モンゴル・オルスにおける東モンゴルとオイラトの紛争の起因からモンゴル・オルスの内紛、ダユン・ハーンのモンゴル統一、アルタン・ハーンの治世からリグダン・ホトクト・ハーンの即位まで。

また、『蒙古黄金史』は、モンゴル王統を主幹とした編年史であると同時に、ラマ教がモンゴルに浸透した歴史でもある。『蒙古黄金史』の著者が提示した歴史観では、モンゴルの王族はインドのブッダの「黄金の一族」に起源をもつ「聖

なる血筋」を引き、大元オルスが滅びて、トゴンテムル・ハーンが大都から逃げる際に、ブッダの教えと仏教経典を大都に置き去りにしてしまう。その様子を『蒙古黄金史』は次のように記している。

皇居を出る時に

宝のようなブッダの教えと経典が置き去りにさ

その時が来ると神明なる菩薩は弁明してくれ、

後世に。

戻ってきて恩沢を賜れ、

チンギス・ハーンの黄金の一族に

《
》

(『蒙古黄金史』 p50)

この詩から見てとれるように、大都を去る際に、「宝のようなブッダの教えと経典が置き去りにされた」ことは、著者の歴史認識の思想的前提を表わしており、このことが、編年史によって「黄金家族」と仏教を関係させ、モンゴルに仏教が再導入される理由を強化しているのである。なお、大都を失った後、モンゴル内部では紛争が続いたが、著者の「戻ってきて恩沢を賜れ、チンギス・ハーンの黄金の一族に」という願いは、16世紀にアルタン・ハーン（1507-82）がチベット仏教ゲルク派に入信したことでようやく実現されることとなる。このように、『蒙古黄金史』の著者は、「黄金家族」の運命とモンゴルにおける仏教の興隆と衰退とを関連させたのである。

便宜上、黄金史における内容を以下のように表でまとめてみた。

『蒙古黄金史』の内容構成

王統	内容	全体における	仏
----	----	--------	---

		北京Ⅱ	小林	教
インドの王統	インドの最初の王統であるマハー・サマディから始まり、五転輪王、そして釋迦牟尼ブツダの子ラホリまで。	1-2	3-4	ブツダの「黄金家族」の後裔
チベットの王統	マハー・サマディ王の黄金の氏族がチベットにき、ニャ・ティ・ツアンボとなり、七人のき子を有する王をて、モンゴルにつながる。	3-4	5-6	
チンギス・ハーンの	ブルデ・チからイエスゲイ・バートルまでの10代。『秘史』と基本的に同じ。	4-9	6-11	
チンギス・ハーンの事	チンギス・ハーンから始まり、チンギス・ハーンの一生涯を記録。	9-42	11-64	
オゴディ・ハーンからオハント・ハーンまで	チンギス・ハーンの後者オゴディ・ハーンから大元オルスの最後の皇帝トゴンテムルまでの14人の皇帝。	42-50	64-82	から喪失
モンゴル・オルスのハーンたち	大元オルスの代皇帝トゴンテムルの子、ビリクト・ハーンからリグダン・ハーンまでのモンゴル・オルスのハーンたち。	53-107	93-194	ら再興隆か

表から見てとれるように、『蒙古黄金史』の著者が力を入れて記述したのは、チンギス・ハーンの一生涯の事とモンゴル・オルスの歴史である。それに対して、大元オルスの100年の歴史は8に収められているにすぎない。さらにその8のなかでも、大元オルスの崩壊とトゴンテムル・ハーンの「の」の記述が5にも上る。17世紀に書かれた編年史の一つの共の特徴は、チンギス・ハーンの歴史とモンゴル・オルス時代を最も詳しく論じる一方で、大元オルスの歴史は、トゴンテムル・ハーンの大都（北京）を逃げ出るところを大いに論じることである。

ここで、18世紀以後に書かれたガルダンの『エルデニン・エル（宝の数）』（1741）、ラシプンスクが著した『ボルル・エリ（大元の数）』（1775）などは、むしろ「チンギス・ハーン」という名前より「チンギス・ハーン」という名称を以て、大元オルスが継承持つ「大モンゴル帝国」の後者と

「中 大一統」の王朝である二つの のうちとくに後者を重 じるようになって
 いる。このことは、17世紀に書かれた編年史には「中 の大一統」の歴史観が
 ま 浸透していなかったことを示している。

1-2 サガン・セチェン『蒙古源流』

『ハーン等の根源の宝の概要』は、清朝 隆年間（1736-95年）に漢訳され、
 『四庫全書』（1741-72年に編纂）に収められたことで、比 的 い時 から学
 者たちの注 を集め、清代漢訳本の書名『 特 特蒙古 等源流』を略した
 『蒙古源流（ ）』として定着した。『蒙古源流』は版本が非常に く、モンゴ
 ル に広く伝わっている編年史である。岡 は、『蒙古源流』の著者サガ
 ン・セチェンが、内モンゴルのオルドス 方の出身であるのに対し、 隆帝に『蒙
 古源流』を献上したチングンジャブがハルハ・モンゴルのサイン・ ヤン部ジャ
 サク親王であったことから、「こ

の 年の間に『蒙古源流』が、
 モンゴルのオルドス部から、北モ
 んゴルのサイン・ ヤン部まで広
 がっていたことがこれでもわかる」
 と している（岡 2004、
 p366）。

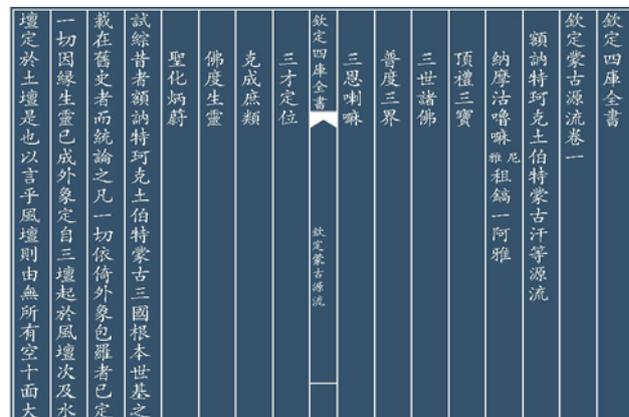


図 1 四庫全書所収『蒙古源流』

モンゴルの に広く られ、
 くの人に書き写された『蒙古源流』
 の 種写本を見ると、写し手たちの経 事情など伝 の がうかがえる。写本
 の中には の節 のために一葉にぎっしりと書き み、 行する際には を残
 さ よう一つの文字を って 行しているものもある。清 にモンゴル語の 興
 を唱え、モンゴル語の教 書、文法書を書き残したナソンオルト（[nasun-urtu]）

は、文字を真中から取り出して行することを「(ブツダの) 教え、真が書かれた経典をきりでったのと同じ」であると、書法の「第一の」としてしている(アル金等 1993、p28)。モンゴル語では、一つの文字を取り出すと、意味が全く違うものになることがある。たゞ、『蒙古源流』が広くモンゴルから北モンゴルまで広がったには、写し手である識人やラマ僧たちの非常な力があり、それは書法を以てしてまで、貴重な源を最大に利用しなければならなかったの。このような現象はかのロブサンダンジン『アルタン・トブチ』などの編年史の写本からも認めできるが。これは編年史が広くモンゴルの人にされたものであると見えよう。

『蒙古源流』は北モンゴルに広がったため、多くの写本が残されているが、よく知られた版本には次のようなものがある。

モンゴル国国立図書館所のフレー本は、17世紀の写本であり、もっともこの版本と評されている。内蒙古社 学 図書館所の版本に、オルドスから見つかった「アラグ・スルデ」本、昭盟 旗から見つかった「シャラ・ジー」本、昭盟ウーシン旗から見つかった「ワンチ クラブダン」本、巴爾盟オラド前旗から見つかった「ジャラガラント」本などがある。このほか、アントア・モンスタールト(1881-1971、Antoine Mostaert、モンゴル名ティアン・バイシ、中国名 清 以下ティアン・バイシとする)がオルドスから発見した「ドグルジャブ」本と「トゥメンウルジェイ」本があり、2007年にオルドス 所の二つの写本を影 版のかたちで、響社から出版している(『蒙古源流 内モンゴル自治区オルドス 所の二種の写本 (Erdeniyin Tobči by Sa ang Sečen Two Manuscripts from Ordos, Inner Mongolia)』 編、Narason 序文、Tobčín 響社、2007)。

1766年にチングン
 ジャブが 隆帝に献上
 した写本は、「チング
 ンジャブ」本と呼ばれ、
 満州語、漢語に翻訳す
 る作業のために書き写

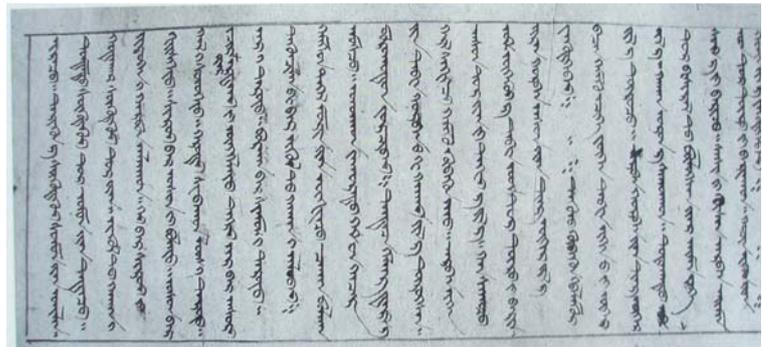


図 2 オルドス所 『蒙古源流』手写本(2007 写真版より)

された版本を「宮廷本」または「内 本」と呼び、これらに再び編集を加えて
 に 版 させたものが「 本」である。

『蒙古源流』はモンゴル本 における民間ルートと清朝による政 ルートでモン
 ゴル、満州、漢語の三つの 語で広まり、『モンゴル秘史』と でモンゴル
 の歴史、文学史において重要な位置を 得した。モンゴル内外において、『蒙古
 源流』が かの黄金史よりも 広く られたのには、チングンジャブが清朝宮廷
 に写本を献上したことが大きく 献したが、もう一つの要因が考えられる。それ
 は『蒙古源流』の著者が、サガン・セチェン・ホンタイジ([sayang sečen qung
 taiji]) であることである。この名前が提示してくれる情報 けでもその 位と身
 分がわかる。サガン (sayang) は名前であり、セチェン (sečen) は称号であり、
 サガン・セチェンは、「 識のある 者」を す。そしてホンタイジ (qung taiji)
 は、漢 では「皇 」、「皇 」、「黄 」などと訳され、チングス・ハ
 ーンの「黄金の家族」に出自を持つことを表す。サガン・セチェン・ホンタイジ
 は1604年()に生まれ、 はバトゥ・ホンタイジ([batu qung taiji])、
 はウルジェイ=イリドゥチ・ダルハン・バートル([Öljei ildüči darqan
 bayatur])、 はモンゴル史上有名なホトクト・セチェン・ホンタイジであ
 り、アルタン・ハーンがチベットからゲルク派ラマ教をモンゴルに導入した事業
 におけるキーマンでもある。ホトクト・セチェン・ホンタイジは、ソーシ ー(州)
 という から大元オールのフビライ・ハーンが著したとされる『 十

の典章』を発見し、編纂した人でもある。この書は、フビライ・ハーンが「ブツダの教え」と「政治」という二つのソン（^{まつり}政治）を等しく行った際として位置づけられ、アルタン・ハーンがラマ教を導入する理論的根拠をなす。このことについて、詳しくは第三章で論じたい。また、高ムタルニ・ホータイジ（**[num tarni qoo taiji]**）は、名前からは、仏教信者であったと推測される。「ムn」は「お経」という意味で、「タルニtarni」は「文」という意味である。ホトクト・セチェン・ホンタイジが仏教の導入に最も活きた人となったのも、その代からチベット仏教と関係を持っていたからではないかと考えられる。

サガン・セチェン・ホンタイジの家は識人家であったと同時に、その称号が表しているようにな軍も出した文にでた名であった。「ダルハン a an」とはのちをされる最高の名身分である。『モンゴル秘史』には、チンギス・ハーンの命を助けたソルハン・シャラーやメグリグなどがダルハンに封じられている。また、ウルジェイ・イルドゥチも、オイラドやトクマクに参加し、数の軍をたてた。

仏教導入の献者であるホトクタイ・セチェン・ホンタイジと『蒙古源流』の著者サガン・セチェン・ホンタイジの二人は、のイ・シャブル（**[yike šibar]**）のシャブル・スウム（**[šibar sum-e]**）というにられている。はオールドス方で調査を行い、シャブル・スウムが1958年に共に壊され、二人のホンタイジのもにされたことを報している（2005）。

『蒙古源流』の著者はあまりにも有名で、研究もい時から行われているため、『蒙古源流』が書かれた年代は、1662年であるという結論にしている。さらにウラン（**[Ulayan]**）の最の研究『「蒙古源流」研究』では、1662年3月から7月中に書かれたと報されている。

『蒙古源流』は、四庫全書に収録される際に全に分けられている。岡

の訳本は、書かれた内容をもとに、本文を 章に分け、 論と を加えて、
11 章に みなおしている（岡 訳注（2004）『蒙古源流』 書）。以下、
構成を表にまとめてみた。

『蒙古源流』の内容構成

		内容	全体に める 合	
			アラ グ・ソウ ルデ 本	岡 訳本
1	世の 成	人間世の成立から人の発生、人初めての帝王。	1 6 16	3 13
2	インド王 統	迦氏族の系譜からセーナ王朝まで。	6 17 9 6	14 20
3	チベット 王統	チベットの王家の起源から、仏教が中国、 ルの方向からチベットで広まった 。	9 7 27 8	21 60
4	モンゴル 王統	ブッダの黄金の一族がモンゴルにきてから チンギス・ハーンが王からを受け、 天から を かるまで(1193年)。	27 9 36 6	61 98
5	中国の王 統	漢高から金国までは、中国の皇帝として 論じ、チンギス・ハーンが金国を滅すま で。	36 7 39 2	98 112
6	モンゴル のハーン 等	チンギス・ハーンがタングド国()を滅 すから、モンゴルの最後のハーン、リグ ダン・ホトクトまで。	39 3 69 18	113-246
7	モンゴル の中興と チベット 仏教の再 流入	ダヤン・ハーン、アルタン・ハーンの治世 とダヤン・ハーンの諸子孫の系譜、仏教が モンゴルに再流入した歴史。	69 19 89 2	247-316
8	満州人の 王統	満州の、 のことと明朝の 国 (1644)。	89 2 91 11	317-324
9	明朝諸皇 帝	明朝 17 皇帝の生年、在位年数など。	91 12 93	325-337
10	清代初 の仏教	清国の 治、康熙二皇帝の仏教に対する政 。	93 95 7	338-342
11		著者の意図、参考文献を詩の で論じてい る。	95 8 95 16	343-344

内容構成からみると、先に見た『蒙古黄金史』の構 に ていることが分かる。
人間世の成、人の由来が最も詳しく論じられ、続いてインド、チベット、

モンゴルの王統をブッダの「黄金の家族」からの起源をもつ同源同根であることが記述されている。 は『蒙古源流研究』において次のように見ている。

書中第一、二、三部分、 在仏教 世説和 、 、蒙一統論的思想 導下写的、 内容 蒙古史本 関係、 著者視 蒙古 統史 不 少的前史部分、 部分内容 全書 的 1 4。

本書の第一、二、三の部分は、仏教の 世説とインド、チベット、モンゴルが同起源であるという思想的 導下に書きあげられたものであり、これらの内容はモンゴルの歴史と 関係である。しかし著者にはモンゴルの王統にかせない前史として認識され、これらの内容が全書の四分の一の分 を めている。

(2001、p20)

は、人間世 の 成からモンゴルの王統にいたるまでの記述を 意味と考える。しかし、 が 意味とするこの部分は、チンギス・ハーン、フビライ・ハーン び仏教を再導入したアルタン・ハーンが「チャクラ ルティのフビルガン（転輪王）」として、「五 四 」の国 を統治するという著者の思想の前提をなすもの と考えられ、それにより、チンギス・ハーンの「黄金家族」がブッダの神聖なる をもともと えるということになるのである。詳しくは第二節で論じるが、これは仏教と「黄金家族」とを一体化させる作業の基 であるといえる。4-7 の部分はモンゴルの歴史であり、5 の部分には中国王統史が挿入されているが、この部分が全書の半分を め、中でもモンゴル・オルス時代の歴史が三分の二を めている。8、9、10 はそれ れ明朝と満州の王統、清国初 の仏教に対する が論じられている。

1-3 ロブサンダンジン『アルタン・トブチ』

『古のハーンたちが定めた政 の定めを概略して記したアルタン・トブチとい
う書』([Eerten-u had-un ündüsülegsен törö yosun-u jökiyal-l
tobčilan quriyaᠰan altan tvbči kemekü orvosibai]) は、17 世紀のもう一つ
の重要な編年史である。グーシの称号をもつラマ僧 であつたロブサンダンジン
によるこの編年史は 1939 年に小林高四郎訳で『蒙古黄金史』と題して出版された
『アルタン・トブチ』と区別して、ロブサンダンジン
の『アルタン・トブチ』あるいは口『アルタン・トブ
チ』とよばれている。著者のロブサンダンジン([bLo
bzañ bstan 'jin])は、ラマ教の僧 であり、自らのこ
とを「グーシ」([guurši] 国)、アヤガ・テグム
リグ([ayax-a tegumlig] 比)と、次のように
文に記している。

《 177 》

あー、 ある、神 力ある聖者ら、
ハン等の根源を種 の歴史から
比 であるシャシャナ・ダラ・ロブサンダン
ジンといわれる国 が、
「広大なる大国を[一つに]つなげるがよい。」
と め記させたそれによって
生すべてを き により支配し、
命、 が くなって、

と び持つものとなるがよい(177 177) (森川哲雄 2007、p310) 。

ここで注意したいのは、森川哲雄が「記させた」と訳した「ᠪᠢᠴᠢᠭᠦᠯᠦᠭᠰᠢᠨ」[bičigülügen]の語である。S ビラは、この語の から『アルタン・トブチ』はロブサンダンジンが 人かのラマ僧を して書かせた共同作 と主張している。「ᠪᠢᠴᠢᠭᠦᠯᠦᠭᠰᠢᠨ」は「 かに書かせた」という意味であり、自分で書いたことは「[bičibe]」となるためである。この の活用 は命 を表わすものである。S ビラの共同作であるという は、『アルタン・トブチ』の内容の構成から見ても を得ているように思われる。

『アルタン・トブチ』の内容は、『アルタン・トブチ』の 葉を りると、「古のハンらの起源、インド、チベット以来のモンゴルのハン 、まず最初の聖なるチンギス・ハーン、その孫であるフビライ・セチェン・ハーンよりつながるダヤン・ハーン びそれからリグダン・ホトクト・ハーンまでを して論じた」(アルタン・トブチ p177)ものであるが、次のように表にまとめてみた。

『アルタン・トブチ』の内容構成

分	内容	数(行数)
世の成 と人間の	仏教の教えによる世の成、 に わされ に る人 の争いとそれを治めるためにマハ ー・サマディ王が現れる。	1-2 27
インド・チベ ット王統	六人の転輪王の黄金一族がチベットの王となり、 チベットに仏教を広めた。	2 28-4 17
チンギス・ハ ーンの	き の伝説からチンギス・ハーンが生まれるま で。	4 18-13 14
チンギス・ハ ーンの事 と教	チンギス・ハーンの一生を記述。 くのビルグ(教)を記録する。 ハサル、ベレグディ二人の に対する教 子に対する教 人の大 に対する教 の教 四人の 子に対する教 子たち、大 との政治、国家、軍事に関する 対 、次 などに を える際に した教 チンギス・ハーンの死	13 15 127 36 27-37 77 24-78 78 85 12 86 89 92 10 103 -110 22 118 -121 125 —127
大元オルス の諸ハーン	モンゴルが仏教に入信 大元オルスの諸ハーンたちの国 たち	

	トゴンテムル・ハーンの退と「の」 明朝諸皇帝	128 140 11
モンゴル・オ ルスの諸ハ ーン	トゴンテムル・ハーンからダヤン・ハーンの治世 まで	140 11 169
ラマ教の再 流入	アルタン・ハーンの治世 ダライ・ラマがモンゴルをれる 四世ダライ・ラマ＝ンドンジャムツォが黄金家 族に生まれる リグダン・ハーンの経典翻訳	169 172
ハラチン部 の系譜と	きの伝説から当時のモンゴル諸部の系譜 ハラチン部の系譜 ハラチン部の 終りの葉	172 23-177

『アルタン・トブチ』は、『蒙古黄金史』と似たような構成を持っているが、内容の点では『蒙古黄金史』を参考にしている。人間世の成り立ちを説く仏教的世説から始まり、インド、チベットの王統を論じた後、モンゴル歴史の部分は、モンゴルの伝説上の先「ブルデ・チ、ゴアー・マラル（き、き）」の伝説からチンギス・ハーンの死までの部分が全書の大半を占め、『モンゴル秘史』の282節のうち233節が『アルタン・トブチ』に収録されていることは、多くの学者たちの研究によって認められており、また『モンゴル秘史』を漢字表記の写本からモンゴル語に還元する際、貴重な参考とされた。モンゴル語、チベット語、漢語を用いるこの高僧が用いた『モンゴル秘史』は、モンゴル語写本であったか、それとも漢字表記された写本であったのかという点において学者たちから注釈されており、『モンゴル秘史』のモンゴル語版の発見にわずかながらされている。『モンゴル秘史』の点か、『モンゴル秘史』に記録されていない「チンギスのビリグ（[činggis-in bilig] チンギス・ハーン）」、『大ヤサ』やラシード・ウッディンの『史集』にしか見られない『アルタン・デブテル』の内容が記録されている。「チンギスのビリグ」は、チンギス・ハーンがヤサ子、など家族や大の教、国家、軍事、政治についての対である。

る。『アルタン・デブテル（黄金の ）』は、ラシード・ウッディンが『史集』を編纂する際利用したと記録されている宮廷実録である。学者たちはロブサンダンジンが『モンゴル秘史』以外にも現在に伝えられていない12-13世紀のモンゴルの古い歴史書を利用したと推定している。

『アルタン・トブチ』の編纂年代については、1721年（ジャムツラフ）、1649-56年（ティアン・バイシ）、1651-55年（ワルター・ハイシツ）、1628-34（金）などの諸説あるが、1655年以前に書かれたという説が最も有力であると考えられる。

ロブサンダンジンは『アルタン・トブチ』において、モンゴルの歴史を仏教史におけるマハーサンマダ王から、インド、チベットを経て、チンギス・ハーン（大モンゴル帝国）、フビライ・ハーン（大元ウルス）、ダヤン・ハーン（モンゴル・ウルス）という王統にいたる筋で構成し、リグダン・ハーンの死をもって終わらせている。ロブサンダンジンは、モンゴル史を中心に論じ、ラマ教のモンゴルでの布教史についてほとんど論じていない。また、1636年以前、満州のハーンが「ボグダ・セチェン・ハーン」と称し、モンゴルの統一なハーンとなったことを主張したにもかかわらず、ロブサンダンジンは無視して論じることを避けている。サガン・セチェンの『蒙古源流』は、1636年のチャハル部が満州に侵入したことをモンゴル・ウルスの滅亡として論じているが、ロブサンダンジンは、モンゴル・ウルスは継続していると考えていた。それはハルハ、オイラト部は、まだモンゴル・ウルスの後継者として独立を主張していたからである。

『アルタン・トブチ』の著者ロブサンダンジンは、『モンゴル秘史』を系統的かつその内容をほぼ完全に引用し、記録して残した歴史家である。そして大の古い伝説、民間伝説を記録し、チベットラマ教における編年史の影響を受けながら、『アルタン・トブチ』は『モンゴル秘史』の歴史スタイルにかなり似かたちを成した。

1-4 名氏『シャラ・トージ』

17世紀に書かれた編年史のもう一つの重要な著作は『シャラ・トージ』である。『シャラ・トージ』には、¹⁾ の四つの写本があり、写本によって題名と内容の²⁾ がある。本は、1891年にロシアのチルク学者ラドロフが収集したもので、『ラドロフ史』とも呼ばれる。本はタイトルを³⁾ 最初の⁴⁾ つかの⁵⁾ がなくなっており、SHビラによると1677年に書かれた『アサラグチという史書』の内容が後の人により行と行の間に書き⁶⁾ されているという（SHビラ1988、p214）。本は、ロシアの蒙古学者⁷⁾ ド⁸⁾ ーエフが1867-78年に発見した二のうちの一つであり、表⁹⁾ がなくなっている。本は、題名を『古のモンゴルのハーンたちの起源を記した大黃史』という。以上の三本はロシア¹⁰⁾ 学¹¹⁾ 東方学研究所に所¹²⁾ されている（¹³⁾ 都日古2006）。本は、モンゴル国国立図書¹⁴⁾ 所¹⁵⁾ され、『ダライ・ラマがお説きになった¹⁶⁾ 者の¹⁷⁾ というハン等、¹⁸⁾ ヤン等の根源の歴史』（《¹⁹⁾ 》[*dalai blam-a-yin nomlajsan jalajs-un qurim kemekü qad noyad-un uy teüke*]）という題名が付けら、一²⁰⁾ に最も古い写本であるとみられている。

1983年に中国の学者²¹⁾ カ²²⁾ 図は四本の『シャラ・トージ』をもとに校訂本を中国民族出版社より出版し、中国蒙古史学²³⁾ の『蒙古史研究』第二²⁴⁾ にその漢訳をした。カ²⁵⁾ 図はシャラ・トージの作者はオルドスのトバ・ジ²⁶⁾ ン（[*toba jinung*]）であるという説を²⁷⁾ 持しているが、学者によって意見が大きく分かれている。SHビラは、ハルハ・モンゴルのトバ・タイジ（[*tuba taiji*]）であると主張している。内容から見れば、²⁸⁾ モンゴルで起こったモンゴルと満州の軍事衝突など一連の歴史事件は、非常に簡略化されるか、まったく書かれていない。そして本の中心は、ハルハ・モンゴルの²⁹⁾ 主³⁰⁾ ゲルセンジェの家譜を非常に詳しく書き残している。

また、編年史のなかで、手書きで書き写す際に写し手によって最もおおくの
が加えられたのが『ジャラ・トージ』である。そのため、ジャムツラフは17
世紀に成されたとみているし、チイジ()は「この書(ジャラ・ト
ージ)が1662年以前に書かれたことは全くいをさないことである」(文漢、
1994、p51)としている。それに対し、森川哲雄は18世紀初頭に成さ
れたと考えている(森川哲雄 2007、pp289-91)。しかし、『ジャラ・トージ』
はハルハ・モンゴルの主ゲルセンジェの家系を論じ、モンゴルの
に関して意図的に論述を避けている。また、サガン・セチェンが「大ハーンが
すると国が滅び、がするとが壊れる」と判したリグダン・ハーンについ
て、「金輪をす法王」とっている。これはモンゴル部におけるリグダン・
ハーンに対する評とかなりうものである。これらを合わせて考えると、著者
はハルハ出身で、ハルハ・モンゴルが満州に
する前に書かれたというSH
ビラの説が有力に思われる。写本に対する文献学研究の報
を見ても、やはり
17世紀後半に書かれ、その後
書き写された際にその都
内容が書き加えられて
きたと考える
うが
当であると思われる。

本論では、内モンゴルの力
図が校訂し、1983年に中国民族出版社から出版
された版本を用いる。『ジャラ・トージ』は、本文の内容が10章に分けられ、序
を加えて、11章からできている。

序
では、ダライ・ラマの
葉が引用され、著者が『ジャラ・トージ』を著わ
した理由が論じられている。それは、ラマ教最高の活仏であるダライ・ラマのお
葉を
りた、後世の人に自らの歴史を
れないようにせよという
でもあっ
た。

ダライ・ラマのお説きになったジャラグスン・フリムという歴史書は
っている。
じて人は自分の根源を
らなければ森に
った
に同じく、自

分の氏を ならなければ、石に まれた の ときであり、 先の教
典 を読まなければ、(親に) てられた子 の ときである、と。(『シ
ャラ・トージ』序文)

この 葉は、ダライ・ラマ五世アグワンロブサンジャムソ ([ayvanglobsangjamsu] 1617-82) が著した『ジャラグスン・フリム (年の) 』における 葉であり、序文の引用からわかるように、この編年史はチベッ
ト系ラマ教の影響をもっとも受けた歴史書である。また仏教の布教に有利なよう
に歴史事件を都合のいいようにかえて記録されており、オゴディ、オゴディの
子フデン、フビライ等と仏教とを 理に関係づけて論じている。

本文の内容と全文における 合は次の りである。

『シャラ・トージ』の内容構成

	分	内要	ラドル フ	校訂本 フ
1	チンギス・ ハーンの 先	世 の 成 (3-10) 人間の由来 (10-12) インド・チベットの王統 (12-18) チンギス・ハーンの (18-21)	3-21	74-81
2	チンギス・ ハーンの一 生	40 モンゴルの統一、即位。 「五 四 」の タングト・オルス チンギス・ハーンの死	21-47	81-92
3	チンギス・ ハーンの後 裔	大モンゴル帝国の四つのカン国 大元オルスの諸皇帝	47-65	92-101
4	モンゴル・ オルスのハ ーンたち	元の 代皇帝のモンゴル 退 モンゴル・オイラトの内紛 ダヤン・ハーンのモンゴル統一	65-102	101-122
5	ダヤン・ハ ーンの後裔	ダヤン・ハーンが 11 人の 子に を分け る 11 人の王子の後裔	102-161	122-147
6	諸カン国	チンギス・ハーンの諸 子、 たちの後裔 とそのオルス ジ チの後裔、ジ チ・カン国、 チャガディの後裔、チャガディカン国 チンギス・ハーンの たちの後裔	161-164	147-149
7	五 四 、	「五 四 」の由来	164-176	149-154

	モンゴル諸部の起源	モンゴル諸部の構成とその起源 四オイラトの歴史		
8	ハサル・ベレグディの後裔	チンギス・ハーンの後裔 ハサル、ベレグディの後裔	177-194	155-159
9	ハルハ・モンゴルの主ゲルセンジェ	ゲルセンジェのハルハ七旗の統治 後裔、 ゲルセンジェがハルハ七旗を ゲルセンジェの子たち ゲルセンジェの孫たち	222-261	159-172
10	オイラト部の起源	四オイラトと呼ばれるオイラト部を構成する6つのエスニック集	261-262	172-

表から見てとれるように、ハルハ・モンゴルを有したゲルセンジェの一族が最も詳しく論じられているのは明らかである。これは四部の編年史的にみられるものであるが、著者の出身とする集によって、記述にが見られる。これも17世紀のモンゴルの、情報伝での実情から考えれば、全をく記述することは不であった。しかし、『シャラ・トージ』の著者は、モンゴルの全体をくことを強く意識していることが読み取れる。第七の部分に「五四」というモンゴルの歴史記から、東の六のモンゴルとの四のオイラト、そしてチンギス・ハーンたちの後裔と、そのすべてに触れており、モンゴル・オルスの全体における部の重要を強調している。

『シャラ・トージ』の「六の」では、東モンゴルの六つの大集をそれぞれ評し、チャハル・トゥメンは「るの、の」であり、ハルハ・トゥメンは「ハンガイ・ハンに居て、の時をえ、い命のになる」のであり、オールドス・トゥメンは「な のとして、ハサクをる、にある、にある、明なるエジェンののようないをる」など、六つのトゥメンをといあげている。チャハル・トゥメンは、ハーンが自らいるトゥメンであり、またハルハ・トゥメンはチンギス・ハーンの本拠であり、勝利しても、北しても見えてくる、のであり、オールドス・

トゥメンは、チンギス・ハーンの 集 を主 する集 であつた。この からモンゴルの内部における 集 の 分 の様子が える。

単一遊牧経 を基 としたモンゴル内部におけるこれらのエスニックな集 が連 を 持するにはこのような 分 が大きく したのではないかと考えられる。

第二節 「黄金家族」と仏教

2-1 ブッダの「黄金家族」の後裔としてのチンギス・ハーンの一族

前節でみたように、四部の編年史はチンギス・ハーンの 先を語るさい、人間世 の 成に始まり、古代インド、チベットの王統を論じ、そしてインド、チベットの王族とチンギス・ハーンの一族をブッダの「黄金家族」に起源を持つものとして論じている。著者たちの出身 や所 集 により、書かれた歴史内容には 少の があるが、歴史を論じるための前提として「黄金家族」と仏教を関連付けるといふ点では共 している。それでは、この作業がいかに行われたのかについて、編年史の記述を見ていきたい。『モンゴル秘史』には、チンギス・ハーンの 先の由来について次のように記録されている。

1、 Чингис хааны язгуур, дээр тэнгэрээс заяат төрсөн Бөртэ-чино, гэргий Гуа-Маралын хамт тэнгис далайг гэтэлж ирээд Онон мөрний эх Бурхан халдун ууланд нутаглаж Батцагаан гэдэг нэгэн хөвчүнийг төрүүлжээ.

チンギスハガン　　ンゲン
成　思合　の根原。

タカマ　ハラ　ミト　　ウマ　　ア　オオホカミ　　蒙　ボル　テ　チ　　蒙古　ブル　テ　チ
上　天　より　命　ありて　生れたる　き　　ありき。(語　　、源流布　特

この注に引ける蒙古源流は　隆の史　の翻訳せる漢文の本なり。　年　の　、　が　内藤　は、
(その書は蒙文秘史に次ぎて、史学文学に　ある　書なり。その書によりて漢訳本を考訂せ　には、

盛京の官庫にて、蒙古源流の蒙古文の原本を得て写し取れる由なり
も蒙文秘史に抛りて明訳　文の　を　し得るが　しくなるべし。)　その　なる　　き　　あ

りき。(蒙　　麻　、　蒙古　　麻　　。　しきなり。)　　思(大なる　。)を　りて来　。

(　の　　)の　源　に　不　　合　　(不　、元史　即ち神が　不　　蒙古
源流

ブル　ガン　カラ　ドン　、　の　大　特　)に　　して、生れたる　巴　塔　　(源流　塔　察　)あり

き(　　世　1907、pp1-2)。

『モンゴル秘史』においては、「天の命を受けたブルド・チ　とその　ゴア
ー・マラルがテンギスという　を　って、ボルハン・カラドンという　について
生活を　」のがチンギス・ハーンの伝説の　い　先の始まりとなっている。

そしてこのモンゴルの伝説の　先である「上　天　より　命　ありて」生まれたブル
デ・チ　、ゴアー・マラルから13代を経て、ボルジキン氏の始　であるボタン
チル・モンハグ([butančir mungqay]) が生まれるのである。

このボタンチル・モンハグは、アルンゴアー・ハトン([alungyu-a qatun])
が　を　じて生まれたとされている。『元史』、『史集』などでは、チンギス・
ハーンの　先はアルンゴアー・ハトンから語られている。『元史』の「本紀第一
」には次のような記述がみられる。

十世　　、　　果　　、　　、生二子。
次　合　　。　　、　　居、　　中、　　自天　中入、化
　　金　神人、来　　。　　、有　　、一子、即　　。
その(　)十世　先は　　(　)であり、　　はアランゴア(　)といい、

ドブメルゲン（ [dobü mergen] ）に ぎ、二人の 子を 。 はブグ
ティ（ [bügünütei] ）、次 はベルグ ティ（ [belgünütei] ）という。そ
こで が くなり、アランゴアは となったが、 ゲルに ていると、
い が天 から入ってきて、黄金 の神人と変身し、ベッドに づいてくる
を見て、 いておきると、 して一人の 子を 。即ちボドンチル
である。（『元史』中 書 1976 年版、p1）

このボドンチル・モンハグのボルジキン氏族が 10 代を経て、チンギス・ハーン
が生まれるのである。これが『モンゴル秘史』におけるチンギス・ハーンの 先
の系譜である。

しかし、モンゴルで文字が われ始めるのは、1204 年にナイマン国を滅 した
際に、タタトンガ（ [tatatungγ-a] ） という人 を得てからであるといわれ
ている。そしてウイグルジン・モンゴル文字が われ始めてから最初の文字によ
る歴史記録となる『モンゴル秘史』は、1240 年（ 子）の の年にオゴディ・ハ
ーンの命 で編纂された（SH ビラ 1988、 31-42）。つまり、『モンゴル秘史』
は編纂される際、その時点からさらに伝説記 を って書かれたものなのである。
チンギス・ハーンの後 者であるオゴディ・ハーンが『モンゴル秘史』を編纂さ
せ、伝説の人 と伝説に い歴史人 から成る 先の系図を編ませた 的が、チ
ンギス・ハーンの「黄金の一族」の の歴史とチンギス・ハーンの 先である
「聖なる一族の 業」を強調することにあつたのは明らかである。

しかしこれらの伝説上の 雄と半ば伝説上の歴史人 から成る系図がモンゴル
の起源と来歴の記 として定着し、モンゴル人の歴史記 の根本 ターンとなっ
た。これと同時に、『モンゴル秘史』の編纂 で 成された歴史編纂の原 =
「黄金家族」を中心に歴史の連続 を重視する思想が後世の歴史論述の原 とな
った（SH ビラ 1988、 46）。

17世紀の編年史が、『モンゴル秘史』と いうのは、皇帝たちが を った国
家事業ではなく、 原の 識人たちの自発的な編纂行 であったことである。そ
こには 原の歴史家たち自らの歴史観が自由に い で っており、それは「行
国」としての遊牧国家における歴史編纂の特 であるといえる。そして編年史の
著者たちは、『モンゴル秘史』において 成された「黄金家族」を中心に歴史の
連続 を重 じる伝統を受け ぎながら、社 現実を き でいった。

また、17世紀の編年史は、チベット教ラマ教の流入により、「黄金家族」を仏
教と結びつけて論じるようになった けではなく、そのつど歴史を仏教の布教に
有利なように を加えて行った。その最初の作業は、『モンゴル秘史』が残し
たモンゴルの伝説の 先である「ブルデ・チ とその のゴアー・マラル」が
どこから来たかという 題に始まった。

『シャラ・トージ』では、モンゴルの起源について次のように記述されている。

(
《
》1983 80
)

(チベットの)「黄金の の王」というハーンをロンナムという大 が
して王の についたとき、「黄金の の王」の 子はゴン の に い
たが、(そこの人たちに)信用されず、 のゴアー・マラルをつれ、東方
の テンギス を り、ブルハン・ハルドウナという にたどりついて、
「ビデ ([bide] 北)」¹ という人たち(オルス)に出 って、(これ
までの)経 を うと、ビデと人たち(オルス)は し合って(自分たち
の) 様に推 した(『シャラ・トージ』p80)。

このように『シャラ・トージ』は『モンゴル秘史』におけるモンゴルの伝説の先ブルデ・チをチベットの「黄金の王」の子であるとしている。このようなインド、チベット、モンゴルの先をブッダの「黄金の一族」に求める説を「インド・チベット・モンゴル同源説」と呼ぶ。『シャラ・トージ』によるとこの「黄金の王」の先はチベットの初代王「の王」であるという。「の王」は、人最初の王となるマハーサンマタ・ラージャの後裔であり、迦の黄金の一族に出自を持つ（p 80-81）。「の王」はツツ国の国王の子で、生まれたとき、「サイのような法のい がはえ、手の は の のようで、 は下から上に じる」子であった。い たちは「親に をもたらす」と ったが、いかなる でも ることができなかつたため、の に入れてガンガ川に てたのがチベットに流されて来て、チベット人にわれ王とされ、 った人が に せて に戻つたため、「の王」と呼ばれたという（p 78-79）。このことについて『蒙古源流』では、もっとも詳しく記述されている。チベットの人 が の から った子に と聞くと、「こそ天の子である。の 先は のマハーサンマタ王の黄金の一族である」¹¹と え、 が起こつたのかの経 を語って、チベットの王となつたが、このような「サイのような法の い がはえ、手の は の のようで、 は下から上に じる」子が、「その の 子の年（仏滅の 年）以来 二十一年の の年（ 紀元前 313 年）に王位につき、ニャテシ・ツェン と称し」、「四方の異種族を して、十 のチベット人の 主となつた」¹²のである。

モンゴル編年史におけるこうしたチベット王統についての論述は、著者たちの単なる ではない。サガン・セチェンの『蒙古源流』の参考文献リストにはチベットの編年史『 史』、シャル ・ホトクトの『諸ハーンの源流』などが示されている。それらのチベット仏教史書には、ニャティ・ツェン（ ）が

ブッダの「黄金の一族」であるという記述がある。ここで、このようなインドから来たというチベット人の民族起源の信は「來說」と呼ばれ、現在中国では国分をてるとしてしく判される。

有一種「來說」、一関 伝仏教歴史著作中、伝説中的 王 的 始、説成 迦王族的 巴 王子 着的 従、来 日、一 有 分的 人所見、部 中、王、称 王。推 出 族発源、説 和 国 区 「文化同源」的 「 子関係」。「來說」不 国 分 出去 根拠。

そのか「來說」（北方少数民族が下しチベット族になったという北來說）があり、一部のチベット系仏教の歴史書に、伝説のチベット王の先ニヤティ・ツェンを、インドの迦の王族の一人である巴王子が従を連れて、してヤルルン川の天のにやってきたとき、チベットのあの人たちに見つかり、にせられ部に連れられ、王とされたため、「のの王」と称されたとする。そこからチベット民族の起源はインドにあるとされ、でたらめにもインドとが国のチベット区を「文化的に同源」を持つ「子関係」にあるという。（中略）「來說」はが国のチベットを分させるための根拠作りにすぎないもの。（1994、p10）

この「來說」として古くから根強く在しているチベット系仏教の歴史が17世紀のモンゴルの編年史の著者を「触発」したにいない。編年史の著者たちはモンゴルの伝説の先をチベットの伝説とつなことで、チンギス・ハーン一族を迦の「黄金の家族」と自然につなことができるようになったのである。

1911年に中国の「命」の勝利によって「駆」が実現した年の1912

年にチベット人活仏ジェブツンダンバ 世([jibžundanba hutugtu])はモンゴル国の皇帝に即位し、「ボグダ・ハーン ([buyda qaγan]) 」と称することになった。もともとジェブツンダンバ・ホトクト一世、二世は「黄金家族」の後裔であるハルハ・モンゴルのトゥシエド・ハーン家から出ていた。しかし、三世からは清朝によってチベットから認定されるようになっていた。その理由を宮子は「ジンガル滅後、ハルハのチンゲンブの反乱に際した隆帝は、来、ジェブツンダンバを中心にハルハ王公が結ぶることのないよう、転生者をチベットから出すことにめた」(宮子 2002, p233) としている。1912年に活仏ジェブツンダンバ 世が「ボグダ・ハーン」と称せたのも、活仏ジェブツンダンバ・ホトクト 世は、血統的にチベット人であっても、転生の理念によればブダの後裔チンギス・ハーンの「黄金家族」であるとされたからである。それは、モンゴルの人にとっては、1636年に後に清朝となる後金国の皇帝に選ばれたチンギス・ハーンの「ボグダ・ハーン」の称号を取り戻したというように理されたのう。そのため、チベットにおける「来説」に対するの判はある意味でいものであるといえる。

ところで、17世紀のモンゴル歴史家たちはチンギス・ハーンを仏教における転輪王であるという説の発明家ではなく、非常に生動的にした者にすぎなかった。チンギス・ハーンが迦の「黄金の一族」であるチャクラルティ・ハーン(転輪王)として説かれるのは、大元オルスの国グバ¹の『所論』にはじまるのである。著名な学者(1928)と、布(布 1981)は、編年史における「インド・チベット・モンゴル同源説」は『所論』の影響を受けて書かれたとしている。

2-2 『所論』と転輪王チャクラルティ・ハーン説の起源

フビライ・ハーンの国となったグバ・ラマの『所論』は、人間世の成、人の由来、人間の王統の由来など仏教世の認識と業法を論じた仏教經典である。文中で「所論者、菩薩真金子求、法王上薩思迦大比發思巴。 (所論は、菩薩なる真金子の要にこたえるのがゆえに(書かれた)。法王大サガー・バンディダの元でのをうけた比なるグバ)」と記していることから、『所論』は、フビライの後者に定されていた真金子のために書かれた仏教説書であることが分かる。

『所論』は、仏教の教えにおける人間世の成、人間の由来を説いたあと、人の初めての王となるマハーサンマタ・ラージャが仏の教えによって四大の黄金の輪を転させるチャクラルティ王となったことを論じている。その後「成五王」、「五大転輪王」など1^{あそうぎ} 7 4 506世代がたとき、インドで迦の氏族に^{じう おう}王が生まれ、迦牟尼の出家によって王族はえる(迦種族終)。その後天(インド)、迦国(カシミル)、大理国、国などの国が仏法を興隆させ、自分の王を有するが、やがて、モンゴルにその「の実」が実り、チンギス・ハーンが生まれる。グバは次のようにする。

北蒙古国、先果生王、名成思。始成思從北方王国輪王。子名果、時称。帝王位、前。有子名古、帝王位成思皇帝。次子名。子、名蒙。王位。王名、帝王位。諸国広仏教法化民。仏教前明盛。帝有三子、真金、天法宝。二、三。本系尔。始從迦王種、王種。

北のモンゴル国、先代のの実がし、王が生まれ、名前はチンギスという。

チンギスから始めて北方の諸国を 輪王として統治した。 の子はオゴディ
と い、ハーンとして王位を引き ぎ、国 は広まった。その 子はフデン(
[kudeng])と い、チンギス・ハーンの帝位を 。 (チンギス・ハーン
の) 二 はトルイ ([tului]) といい、トルイの がモン ([müngke])
であり、また王位を 。その フビライは、ハーン位を ぎ、諸国を
させ、国 が かつ広く、仏教に し人民を開化させ、ブツダの教えは
更なる隆盛を得た。ハーンには三人の 子がいる。 は真金() 、天の
法宝の き さである。二 はマンガラ([menggele])、三 はナモハ
ン([nomuqan])という。みな堂 たる ある血筋を 者である。これは
迦の王族から始まり、現 の王族に ったのである (グバ『 所 論』
編上)。

グバ・ラマの『 所 論』には、チンギス・ハーンはマハーサンマタ・ラー
ジャの後裔である五大転輪王のなかの 輪王チャクラ ルティ・ハーンであり、
迦の王族に起源を持つと書かれている。た 、『 所 論』が書かれた 13 世紀
においては、チンギス・ハーンをチベット王族の後裔とする 要 はまったくな
く、むしろ な作業であった。この皇 子真金に献上した経典は、真金 子を
フビライの として記録している。真金はフビライの三 であり、国 として
フビライ・ハーンの であった グバがそれを聞 えて記録したとは考えられ
ない。そしてチンギス・ハーンをブツダの 迦氏族として論じたのもフビライの
王族 の であったにすぎない。 グバ・ラマは、自らの説を理論的に 明し
ようとしてもいなければ、上で引用した一 は、『 所 論』上編の終わりに
くっ付けたものである。この一 がなくても、『 所 論』の全体には の影
響もないのである。

しかし、このチンギス・ハーンをブツダの「黄金の一族」の後裔とするロジッ

クは、17世紀のモンゴルの編年史の著者たちにとっては、意味深い「触発」であったに違いない。「触発」であるということは、17世紀の編年史における「黄金家族」と仏教との結びつきは、単なる歴史の出来事ではなく、編年史の著者たち、つまり17世紀モンゴル歴史家たちのアイデンティティの表出であったのである。

限の想を留め残す『モンゴル秘史』の第一節に書かれた伝説におけるブルデ・チグテンとその子孫のゴアー・マラルがどこからテンギスを連れて来たかという話が非常に自然なかたちで述べられている。

17世紀のモンゴル編年史において、チンギス・ハーンの「黄金家族」をチベット系の王族を経由して、ブッダの黄金の一族に関係づける歴史の記述方法が完成された。この記述方式は19世紀までにモンゴルの歴史編纂に影響し続けた。そして、ここまで見たように、17世紀の編年史における「黄金家族」と仏教の合一化の作業は、単なる出来事ではないということは重要であり、それが主体的アイデンティティの表出であるということは、17世紀の歴史家たちの歴史記述に対する意図的な出来事からも認められる。

2-3 歴史の

17世紀のモンゴル編年史は、チベット系仏教の影響を受け、チンギス・ハーンの伝説の出来事を仏教世界に位置づけて論じることで、仏教という外来の思想体系をモンゴルの固有の出来事と合体させた。そしてこの説を信じさせるために、編年史の著者たちは歴史を記述することさえおしななかつた。『シャラ・トージ』に次のような記述がある。

(チンギス・ハーンが) 45 の時チベットのグルゲ・ドルジェ・ハーンに向
かって出 すると、チベットのハーンは、イラホという大 を代表に大 た
ちに をもたせて し、チャイダム () の にナチンを えた。
チンギス・ハーンは (を) 受け入れ、 用 を持たせ、イラホ大 を
者として らせ、サキヤ派のチャグ・ロジ ア・アナンダ・ゲルベイという
ラマ僧に「あなたを したいが、天下の事業はいま に のため で
きませ 。 はここからお りし、あなたはそちらから を りなさい」と
書簡とお の を り、マグリは三部族から三省にいた いチベットを
させた (力 図編『シャラ・トージ』1983、p83) 。

ここでチンギス・ハーンが書簡を ったというサキヤ派の僧 チャグ・ロジ
ア・アナンダ・ゲルベイとはサキヤ派の高僧グンガ・ニンブ (1092-1152) のこと
であり、明らかにチンギス・ハーンと同一時代の人 ではない。17 世紀の編年史
で、あえてこうした書き方をした理由は、フビ
ライと グバの関係を づけするためであっ
た。 グマの であるクンガ・ニンブを、チ
ンギス・ハーンと関係づけることで、フビライ・
ハーンと グバの関係をより強調することにな
ったのである。

続いてチンギス・ハーンのインド が論じ

られる。インドでは「セル」呼ばれる人間の 葉を せる神秘的な が現れ、その結果チンギス・ハーンは軍を引き げた。大モンゴル帝国を支えた著名な学者 が「 」と呼 この の説 について、サガン・セチェンは『蒙古源流』でより詳しく論じている。『蒙古源流』では、チンギス・ハーンがチベットを させたあと、 のインドの に り、チンダラナングン・ダバーという を えていく時に、「一 の頭に が一つある、セルという名の が ってきて、主の前に三 を げて、 かずいた（『蒙古源流』アラグ・スルド本p40-1）」¹ ため、チンギス・ハーンは軍を引き戻したと書いてある。そしてチンギス・ハーンの 葉として次のように記した。

そのインドの金 というものは、 の貴い仏たち、菩薩たち、強力な聖者たち、王たちが生まれた という。 、この 葉を らない が、このように人間みたいに かずくのはな 。上なるテングリ が めているの う（『蒙古源流』41）。

このインドで不思議な に出 う伝説は、『元史』の「 本記」にも「 、帝 東 国、 見、 。（この年 1224年 、（チンギス）皇帝が東インド国に り、 が現れ、 を引き戻す）」（『元史』中 書 1976年版、p23）と記録されている。同じことが『元史』の「 伝」にも記録されている。しかし、ジ イニー（1225-83）の『世 者の歴史』（1260年 成）によると、インドの さに えられなくなり、軍を させたのである。そしてインド人 を として い、 の際に しにした（ジ イニー、1980、p158）。編年史の著者たちが、漢 歴史書から引用したのか、またはこの伝説がモンゴルの に らく伝 されたものを参考にしたものなのかは しようがないが、しかし、チベット に関する歴史 の 後に典 で 認 な事件

を大いに論じている。

編年史の著者たちは、モンゴルとチベット、インドをめぐる事件を仏教の布教に有利なように再編集し、それを歴史真実を語る流れの中にそうとした。仏教の影響を大きく受けた歴史家たちは、よりもチンギス・ハーンを仏教世界で再し、それに新たな意味体系をきむことに心した。時にそれを非常に乱雑な形で投げしている。例えば『蒙古黄金史』は、チンギス・ハーンの出生を次のようにしている。

》
18
)

(
《

天から命を受けて生まれたのがテムジン＝チンギス・ハーンである。ブッダのに入り三二五十年あまり経った後、十二人のハーンが生まれ、一の生をしめ果したとき、らをするため、ブッダに記（[jiwanggirid]）¹をえられ、チンギス・ハーンが生まれたの。五四をはじめ、提¹の三六十一の氏族、七十二種の語の国からを徴収し、手をばしてれるように和にらすことができるようになり、転輪王チャクラルティ・ハーンのき有名になった（『蒙古黄金史』18）。

『蒙古黄金史』におけるこの論述は、チンギス・ハーンの出生は最初からブッダの記による事であったと論じている。これによりチンギス・ハーン

の「黄金家族」とブッダの一族との関係はこれ以上論じる必要はなくなるのである。

こうして、チンギス・ハーンの「黄金家族」というモンゴルの信仰として
のシニフィアンが仏教の世で再定され、「黄金家族」はモンゴルにおける仏
教の布教をするようになるようになったのである。

布は『蒙古源流』を漢訳する際、序文で次のように論じた。

蒙古史学自從 合 伝 出世 後、 大、小 黄金史 大黄譜
等史作、 以 、 蒙古 先、仏教 蒙古 神。 蒙古秘史 史統
一変、 蒙古源流 集 大成 。 因、 国 、
教喇嘛 思巴所著 所 論 影響所 、 察 因、 合 信
喀巴黄教的結果。

モンゴル史学は『アルタン・ハーン伝』が生してから、大、小『黄金史』
（『蒙古黄金史』と『アルタン・トブチ』をす）、『大黄譜』（『シャ
ラ・トージ』）などの史書を経て、しく（インド）、（チベット）を
モンゴルの起源とし、仏教をモンゴルの神とするようになった。こうして『モ
ンゴル秘史』の史学伝統が一変し、『蒙古源流』になるとそれが集大成を
げた。その 因はフビライの国、 教ラマ ス が著した『 所 論』の
影響によるもので、その 因は察するに、アルタン・ハーンがツォンカバの
黄教を信した結果にある。（ 1980、p7-8）

かに 布が しているように、13世紀に『モンゴル秘史』によって
成されたモンゴルの「史学伝統」が17世紀の編年史にいたると一変したことは問
いない。しかし、帝王を支えた『モンゴル秘史』の「史学伝統」に基づいて17
世紀の編年史を「三四写一不三不四的 事（でたらめにわけのわから

ない を書いてことを ませた)」と論じることは、編年史の著者たち一人 と
りが「自らの歴史に興味をもった」個人であったことを 視することである。こ
れらの人 の歴史に対する興味はそのアイデンティティの変容を反映することに
あった。

えば、編年史と同じ に書かれた『チ ルクの系譜』もそうである。シビル・
カン国アブル・ハチ・バートル・ハーン (1605-63・64) が 1646 年に 成させた
史書『チ ルクの系譜 (Chedjerei-Turk)』は、「 高 上のアッラーは最初の
人間を った」ということばで始まる。アブルハチ・バートル・ハーンは、チン
ギス・ハーンの ジ チの後裔で、シビル・カン国を『シャラ・トージ』では、
「シゲン ([šigen]) 」と、ロブサンダンジンの『アルタン・トブチ』では「シ
バン ([šiban]) 」と記した。アブル・ハチ・バートル・ハーンは、アダム (Adam)
の 生から人 が始まり、そして アの を出た後、ハム (Ha) はインド 、セ
ム (S) はイラン 、ヤペテ (Japhethu) はイジル川に行った。ヤペテは 人
の 子の内 のトゥルクを後 に 定し、その六代ハーンとなるアリンジエ・
ハーンは、自分の を 生 タタールとモウールという二人の 子に分けた。
このモウール・ハーンは、チンギス・ハーンの伝説の 先ブルデ・チ の い
先となる (アブルハチ・バートル・ハーン 2005、pp4-9) 。

仏教を導入し、それを信 したモンゴル・オルスでは、チンギス・ハーンの出
自を自らの信 する仏教に由来すると主張するのと同じく、ムスリム化したシビ
ル・カン国のハーンは、チンギス・ハーンの 先をヤペテに求めた。大モンゴル
帝国の やか崩壊に って、諸カン国が現 化、同化していく 間である。これ
は帝国時代に 成された「モンゴル」は、大元オルス=諸カン国 立時代が終わ
った後に、そのアイデンティティが根本から変化し始めたことを意味するもので
あった。

第三節 語りかける編年史

17世紀に書かれた四部編年史で記述された歴史事件の信実性、その歴史学における重要性については多くの学者に研究され、その重要性が認められているが、神話や伝説が混同する書き方は、例えば「中原の封建時代における史官たちのように記述された歴史認識を受けていない」（真 1987、p75）など、その点が指摘されている。本論の目的は、編年史における歴史記述の歴史事実としての信実性を追求することにはなく、編年史がモンゴルの民族的アイデンティティの形成に果たした役割を追求することにあるため、歴史編纂の形式の在るべき姿勢は論じないことにする。

前節で見たように、編年史の著者たちが、チベット仏教の影響を受け、歴史を論じる前提として「人間世の形成—一人の出現—マハーサンマタ・ラージャ（迦の黄金の一族）—チベット、モンゴルの王統」というチベットの歴史記述の形式を受け入れたのは確かである。これについて、著名なモンゴル学者ウラジミルツォフは、「古いチベット史」を用いたと非難した。布は『蒙古源流』を取り上げて、次のように判断している。

『蒙古源流』の在る後半部、前半部的第一、二、対蒙古史來說 有る么、三、四 中 学 的 。

『蒙古源流』の はその後半部分にあり、前半部分の第一、二 は、モンゴル歴史にとっては の もない、第三、四 でも 学的 が けている。

（ 布 1981、p12）

この第一、二 は、人間世の形成、インド、チベットの王統を論じたものであ

る。そして、ハーンは、インド、チベットとモンゴルを同じくルンの「黄金の一族」に起源をもつものとする編年史の主張を『モンゴル秘史』以来のモンゴルの「歴史伝統を一変させた」とハーンしく判した（ハーン 1981）。

本節では、モンゴルの初めての文字による歴史書としての『モンゴル秘史』が残したルンをハーンみながら、17世紀の編年史の特徴について考察したい。

3-1 遊牧民の「史学伝統」

ハーン中 アジアの「行国」における遊牧民の歴史編纂の特徴を論じるには、まずその「声の文化」としてのルンを見る ハーン必要がある。モンゴルの最初の歴史書『モンゴル秘史』はモンゴルにおける歴史編纂の始まりとされ、その編纂スタイルがモンゴルの「史学伝統」として論じられるが、『モンゴル秘史』自体は、文字以前の「語られる歴史」の変 ハーンであるといえる。

『モンゴル秘史』は1240年に編纂されたモンゴル最初の文字によって書かれた歴史書 ハーンであると同時に13世紀の中 ハーンアジアにおける「行国」の歴史を遊牧民自身が記録した ルンの記録であり、その研究も盛 ハーンにおこなわれてきた。

（1893-1980 ハーン業）は『「モンゴル秘史」源流考』のなかで、『モンゴル秘史』が編纂された大クリルタイの ルンをこう ハーンいた。はれやかな8 ハーンの、ルンレルン川の ルンとりに一人の年をとり、ハーンが見えなくなった ハーン人が ハーンり、そのまわりをチンギス・ハーンの孫や ハーン孫たちが ハーンむ。そして、ハーン人は子 ハーンたちにチンギス・ハーンの ルンを語り始める ¹。この語りの結果、『モンゴル秘史』が生まれた。『モンゴル秘史』の編纂年代に関する ハーンの1264年説はす ハーンに学者たちの反論を呼び起こしたが、ハーンレルン川の ルンとりの ハーンの情 ハーンは『モンゴル秘史』の ハーン生の ハーン間を想 ハーンさせるものである。モンゴルの学者SH ハーンビラは次のように論じている。

い間 によって伝 されてきたチンギス・ハーンの「黄金家族」史は、大クリルタイ(1240年のクリルタイ)で記録され、この家族の代表者たちの認を得た。クリルタイの い 議 間中、古代伝説の収集を った人たちと、チンギス・ハーンの家族、 の大 たちが集まり、記 び宮廷の記録をもとにチンギス・ハーンの家族の歴史における重大な歴史事件を述べ、その場でビチゲチ(書記官)たちに記録させたのであ う。そしてビチゲチたちは民間の 頭伝 人たちの助けを得た。 らは古代モンゴルの 頭詩 の伝唱者であり、クリルタイを む 種の いの活 に 的に参加していた(SH ビラ 1988、p36)。

『モンゴル秘史』が編纂される情 を二人の学者が たような で想 し、その実況を再構成することを んでいる。文字以前の「黄金家族」に関する伝説は、「チンギス・ハーンの家族()の代表者たちの認 を得」て、『モンゴル秘史』に記録された。そして、大クリルタイでの しい取 の、「黄金家族」史は、『モンゴル秘史』として たな姿に一 した。伝説のブルデ・チ からチンギス・ハーンまでの歴史は、「黄金家族」を中心とした統一国家の統治要 によって、大クリルタイに参加した「黄金家族」の要人たちによって に構成しなおされた。そして『モンゴル秘史』はその名前の り、「秘 の歴史」として、モンゴル諸国のハーンたちのオールド(宮廷)に され、「黄金家族」以外の者が することを した。

『モンゴル秘史』は、編集を主導したオゴディ・ハーンの チンギス・ハーン の生 を記録した伝記であり、またモンゴル統一国家の 立史でもある(SH ビラ 1988)。この点は、ペルシアのイル・カン国のカ ン・ハーン(在位 1295-1304)とオルジェイト・ハーン(在位 1304-16)の命を受けて、ラシード・ウッディン(1247-1318)によって編集された『史集』も同じであった。『史集』は、そもそ

もカール・ハーンの「黄金家族」の歴史を語る『カール史』として編纂され、オルジェイト・ハーンに献上されたが、ラシード・ウッディンがさらに「国史」を編纂するように命じられ、「モンゴル史」として『国史』の第一となったものである（宮子 2002、pp45-6）。ラシード・ウッディンは宮廷の書「アルタン・デブテル（黄金の書）」をすることがされたが、ラシード・ウッディンがした「アルタン・デブテル」は、『モンゴル秘史』であったとの推測もある。ペルシアは文字文化の歴史を持っていたが、『史集』にも『モンゴル秘史』の文字以前に成された「語られる歴史」の

関 蒙古人最初生活的詳情、 実 的 述歴史的突 述者説、所有的蒙古部 都 従[時]逃 古 一 来的 個人的氏族 (a 1) 生的。

モンゴル人の生活についての詳しい状況に関して、歴史を語った 実か
つ信 できるチルク人の 述者が うには、すべてのモンゴル人部族は、
(その時に)エレグナ・グーンに逃げ できた二人の氏族 (na 1) から生まれ
たものである (ラシード・ウッディン 1983b、p9)。

ラシード・ウッディンの記述は、二つの情報を提示している。一つは、「史集」
に書かれたモンゴルの起源が「 実かつ信 できるチルク人 述者」の 述に
よるものであるということであり、もう一つは、モンゴルの 先は「エレグナ・
グーンに逃げ できたあの二人の氏族」であるということである。これはどち
らも『モンゴル秘史』に書かれてない内容である。そして、 された歴史編纂
の伝統を有するペルシアの歴史家ラシード・ウッディンはこの による歴史
に対し次のように弁明している。

史学家 [根拠] 不同民族的 [記述] 行著述時、在 的 中 出現分

、 人在 方和 記 中 [自] 、 都 歴史家
関。

歴史家は異なる民族の記述に対して著述する時、 の 葉づかいに、ある人
がある場所にいたとかある記述に があるなど不一致がみられるのは 然
である。た し、 は（書記する）歴史家とは 関係である。

された文字による歴史編纂 の伝統を有するペルシアの歴史家であったラ
シード・ウッディンは 頭伝 に対して 的であったが、 による「黄金家
族」に由来する歴史記述は、『史集』に少なからず影響していたのである。それ
は『元史』の本紀における （チンギス・ハーン）、 （オゴディ・ハーン）
など帝国諸ハーンに関する記述にもみられる。このことは、 世が『モンゴ
ル秘史』を和訳する際、『モンゴル秘史』を の前史を持つ日本書紀や古事記
のようなものとして位置づけ、「 に は 書の訳本を蒙古古事記と名づけ と
したり」（ 世 1907、p58）したことも理 できる。

以上みてきたように、『モンゴル秘史』は文字以前に 成された による歴
史を記録したものであり、そしてモンゴルの文字以前の による「黄金家族」
史は、モンゴルに関する漢 歴史書、ペルシア語の歴史書にもその影響を残した。
そしてその根本思想は「黄金家族」に対する であり、その 的は帝国の支配
を 当化することにあつた。いいかえると、チンギス・ハーンによる統一された
中 集 国家「大モンゴル帝国」の出現により、 からモンゴル 原のチ ルク・
モンゴル民族の間に伝 ・伝唱されていた 原の な 雄に関する伝説・神
も「黄金家族」を中心に集 されていったといえる。ナイマン・オルス、 レイ
ド・オルスのように 原の有力な国家が次 と帝国に 収されたのと同様、 原
の 雄伝説も「黄金家族」に集 され、モンゴルの統一国家意識の根本をなすよ
うになった。

モンゴル帝国の 張により「黄金家族」による統一意識はその 力が ぶ
に広まった。そのため、ペルシアの歴史家ジ イニーは、チンギス・ハーン
びその「黄金家族」に対する の後、モンゴルのムスリム世 における残
な 略と略 を「不 実なものに対する天 」とし、 を す「神の 」のと
して 当化した（ジ イニー、1980、pp16-9）。『史集』はカ ン・ハーン
の「黄金家族」の 業と伝統を うものであり、アブルハチ・バートル・ハーン
著『チ ルクの系譜』は「黄金家族」 の りを いた。そして、ペルシアの
された歴史編纂経 を駆 し、帝国 内の 源を して編纂されたラシー
ド・ウッディンの『史集』は、「黄金家族」を中心にユーラシア史を編成した。
『史集』の著者として られたラシード・ウッディンの名前の影に、ボルド
（ [bolod] ）¹、「 実かつ信 できるチ ルク人 述者」などの『史集』
の共同編纂者が もれてしまっている。『史集』におけるモンゴルに関する部分
の記述にみられる 事詩的な記述、中国に関する部分における実録 の語り、中
東 ーロッ の部分に関するル ルタージ の記述といった特徴は、『史集』
が帝国 の な 源を利用した大プロジェクトであったことを 語っ
ているといえる。しかし、『史集』の編纂のためにペルシアに運ばれた帝国の史
はハーンたちの のなかで帝国と一 に に 失した。

3-2 編年史におけるチンギス・ハーンの死

17世紀の編年史は、『モンゴル秘史』の編纂から 成された「黄金家族」中心
思想を した。そしてそれを仏教思想のなかで再編成し、その重要 を強調し
た。では、「黄金家族」の中心内容であるチンギス・ハーンの歴史について編年
史ではいかに論じられたかを見ていきたい。

1226年にチンギス・ハーンは中 アジア出 の命 を したタングド()
の に出発した。これはチンギス・ハーンの最後の であり、『モンゴル秘

史』にも重要な事件として記録されている。タングト（ ） が重要な事件であるのは、この でチンギス・ハーンが くなるからである。た 、『モンゴル秘史』におけるチンギス・ハーンの死に関する記録は めて簡略的である。

Тангуд улс, үгээ баталж хэлээд тэр хэлсэн үгэндээ хүрсэнгвйн тул дахин байлдахаар явж, Тангуд улсыг сөнөөн дараад гахай жил (1227) [долоон сарын 12-т Түрэмгий балгасанд, А.то.] Чингис хаан, тэнгэрт халив. Халихын өмнө, Тангуд иргэнээс маш олныг Есүй хатанд өгөв.

タングト・オルス、 いの 葉を いながらその ったことを実行しなかつたため再び に出発し、タングド・オルスを滅 して、 の年 (1227) 『アルタン・トブチ』7 12 日 州に)チンギス・ハーンが、天に った。 くなる前に、エスイ・ハトンにたくさ のタングド民を えた (268 節)。

『元史』 ビシビル・カン国アブル・ハチ・バートル・ハーン著『チ ルクの系譜』では、チンギス・ハーンの死後、それを秘 にしてタングド・オルスの皇帝シドルグ・ハーンを した後に公表したという。当時は帝国の 定の要 からチンギス・ハーンの死を く したに いない。『チ ルクの系譜』の記録によると、チンギス・ハーンの死後に反乱が起きたという。それによると、「オゴデイ・ハーンはチンギス・ハーンの死後に に起きた反乱を 定した後、ジ ルマン=ブ とタマスに三 の軍 を эйранに派 し、そこのスルダン・ジャラディンを駆 した」という (布尔・ 巴 2005、p133)。『モンゴル秘史』の記述は、チンギス・ハーンの死を とかして そうとしていたことを想 させるような簡略的な記述である。

しかし、17 世紀の編年史には、チンギス・ハーンの死は にタブーではなくな

っていた。 に、編年史の著者たちはチンギス・ハーンの死を最大限に利用し、「黄金家族」が神聖であることを強調した。『蒙古黄金史』には、タングド・オルスのシドルグ・ハーンとの いを次のように いている。

それからシドルグ・ハガンが となった時に、
主上は となった。トラとなった時に、主上
は 子となった。 子となった時に、主上は
となって られた。

(小林高四郎 1939、p54)

これは神 でしか見られない いぶりであり、 に変身したり、 に化けたりする 的なシドルグ・ハーンとの いは、次のチンギス・ハーンの死を させる記述につながるものであった。シドルグ・ハーンが らえられたあと、チンギス・ハーンに対し次のように する。

をお しなさいますな
その代り金 を てやりませう。 をなくませう。
金 宮を てやりませう。天 を くませう。
をお しになると、ハガンの 命に が います。
お しになら ならば、ハガンの 子孫に が ませ²
(小林高四郎 1939、p54)。

チンギス・ハーンはその 葉をものともしなかった。このことについて『蒙古源流』はより詳しく論じている。シドルグ・ハーン の に対し、チンギス・ハーンは、「 が 世はどうなってもかまわない。 が後裔に であるように」²¹と った。しかし、 の では っても、 てもどうすることもで

きなかった。シドルグ・ハーンはまた、「このののに、三重にって
いたエジプト²²という名ののがある。それればれる」(岡 訳)
といた。そして死前に「、お前たちは、をそうとしている。の身か
らが出れば、の世に不、血が出れば、の子孫に不」(岡 訳)
とって、エジプトという名ののにられて、からを流して死 (『蒙
古源流』p43-4)。

『モンゴル秘史』288節のうち233節を収録しているロブサンダンジンの『ア
ルタン・トブチ』にもこの神が記録されている。そこでも、チンギス・ハーン
の死は、「が世はどうなってもかまわない。が後裔にであるように」と
いう子孫、後裔のためであったということを強調さ
れている。

生のおがそこで出来、
ハーン大の根源となり、
全民の神となり、
の聖なる「」となった

《
》
全

(『蒙古黄金史』p41)。

チンギス・ハーンが死あと、そのがモンゴルの「合的 神 ([yerükei-yin šitügen]) 」としてまつられた。「チンギス・ハーン」を主導
するのはジン(王)であり、「」をし、をう集が日の
オルドス・モンゴルとなった。「」は、モンゴルのハーンの即位など重大
な式を行う場所でもある²。

編年史において、チンギス・ハーンの死は、チンギス・ハーンがモンゴルの
神としてにモンゴルと共するようにされた。チンギス・ハーンの「

合的「神」としての「徴的不死」は、モンゴル・オルスのシンボルとなったのである。17世紀の編年史は、『モンゴル秘史』や『カフカス』によって伝わる「歴史事実」より、人民の口伝によって伝えられた「生きた歴史」を用いた。その結果、編年史のチンギス・ハーンは伝説のなかで生きているチンギス・ハーンであり、実際の歴史における古代人ではなかった。

3-3 語りかける編年史

17世紀の編年史は、伝説のなかで生きている神、伝説を用いて、チンギス・ハーンを構成しなおした。そして編年史のなかでチンギス・ハーンの本質として、彼の教である「チンギスのビリグ（[qinggis-ün bilig]）」を記録した。ラシード・ウッディンは「ビリグ[bilig]」を「大、明」の意味であると示したが、実は「選ばれた人」を意味する。そして「チンギスのビリグ」は、チンギス・ハーンの本質、という意味である。以下は「チンギスのビリグ」という一方向に統一する。

ラシード・ウッディンの『史集』（pp354-62）やジャイニー『世界史の歴史』（pp237-271）、アブル・ハチ・バートル・ハーンの『チルクの系譜』（pp131-3）などのムスリム世界におけるモンゴルの歴史書にも「チンギスのビリグ」と呼ばれるチンギス・ハーン政治、軍事などに関する本質を記録した「チンギス・ハーンの本質行録」が、独立した章を立てて記録されている。

しかし、17世紀の編年史は、独立した章を立てていない。チンギス・ハーンの本質、教は、チンギス・ハーンに関わる神話伝説のなかにもみられ、チンギス・ハーンの本質から語りかけるものであった。先に『蒙古源流』と『蒙古黄金史』から引用したタングドの文でも、「我が世はどんなに変わってもかまわない。我が後裔に代わってほしい」とチンギス・ハーンの本質を語りかけている。つまり、編年史の著者たちから見れば、チンギス・ハーンの本質は本質をさな

いもの ったのである。

ロブサンダンジンの『アルタン・トブチ』は、次のように くの「チンギスの
ビリグ」を記録している。

ハサル、ベレグディ二人の に対する教 (36 27-37)

子に対する教 (77 24-78)

人の大 に対する教 (78 85 12)

の教 (86)

四人の 子に対する教 (89 92 10)

子たち、大 との政治、国家、軍事に関する対 (103 -110 22)

、次 などに を える際に した教 (118 -121) など

これらの ・教 は、チンギス・ハーンと大 、 子や との において
「 の自然な流れ」のなかで記録されたという。このようにチンギス・ハーン
が自らそれを した場 を くことで、「チンギスのビリグ」はチンギス・ハー
ンの の 葉としてモンゴルの人 に信じられたの 。『アルタン・トブチ』
にはチンギス・ハーンの 葉として次のような記述がある。

∴

《
1-06
》

子たち、一族のものたちよ、

これからは して てた が国を かにし、

した（すべて）を く っ て行きなさい。
業しても り果たせないとす に崩れるであ う、
して 業した意味がなくなる う。
業に するより っ ていく うが い う。
一族の者よ、
が がと出し ばる前にじっくり考えなさい、
を えて しく治めなさい（『アルタン・トブチ』 pp90 1）。

これは、チンギス・ハーンが して作ったモンゴル・オルスの政 を るよう
に したものであるが、著者ロブサンダンジン（17世紀初）のモンゴルの内紛に
対する 判であると考えられる。当時、モンゴル・オルスのリグダン・ハーンが
力をもって東部のハルハ・モンゴル びホルチン・モンゴルの諸集 を し
た結果、ホルチン部は後金国と手を結ぶことになる。1636年に後金国はモンゴル
のリグダン・ハーンのチャハル部を り、モンゴル・オルスの滅 を した。
このような現実をロブサンダンジンはチンギス・ハーンの 葉を りて 判した
のである。

中 アジアやイランにおけるモンゴル・諸カン国では、モンゴル人の同化によ
って、その「黄金家族」に関する歴史書に「チンギスのビリグ」は一つの章とし
て記録された。「 的手 、 不 手 、 源（ の 先に づけした
が、それは 先ではなく、 の源であった）。」（ジ イニー、1980、p255）
とイスラム教のなかからその代 語が用意された。それに対し、編年史には
仏教の強い影響が反映されたが、「チンギスのビリグ」にとって代わる 葉が
用意されることはなかった。

『モンゴル秘史』の編纂によって、 原の 雄伝説が「黄金家族」の歴史に集
まれていったのと同様、編年史はモンゴル人のアイデンティティに大きく影響

した「チンギスのビリグ」をより くに作り上げていった。その内容は、チンギス・ハーンの「イ・ジャサク（[yeke jasag]）」と呼ばれる法典を みて、川に 入れたものを入れてはいけない、 くに してはいけない、聖なる の上をまたいではいけない、 の は めなければならない、 原を ってはいけないなど、モンゴルのあらゆる くに ぶものである。モンゴル人が っていくべきとされるすべての が、「チンギスのビリグ」にその根拠を ることができる。 らは次のように している。

所以 成 思 的 表 起来 主的 、实际 推 一代聖哲的文章、従 不 在 力上 起 、在 神和思想上 起 、力 以思想教化、么蒙古黄金家族的統治 有 方 的。

そのため、「チンギスのビリグ」は一見 主の教 のように見えるが、実際には一代 者の に関する文章として 重され、したがって 力上において を有した けではなく、 神思想の でも を立し、 力に思想教化を い、モンゴルの黄金家族の統治は 方 から を有したことになる（ 等 2000、p426）。

引用で見たように、「チンギスのビリグ」は、「黄金家族」の統治に大きな を果たした。その 力と 神思想における の 立は、編年史のチンギス・ハーンの 葉として民 に対して発した語りによるものであるといえる。神 によって構成されたチンギス・ハーンは、民 の意識に り、その を語り続けたのである。

イスラム教 にいたモンゴル諸カン国は同化の一方をたどり、モンゴル帝国時代の「モンゴル」が やかに 体していく時、本拠 のモンゴル高原に残され

た部分もその変容をなくされた。17世紀の編年史には、仏教によって「黄金家族」のをすることで、統一国家をとうとした意識がはっきりしていたといえる。そのため、ロブサンダンジン『アルタン・トブチ』に「の民が語り続けるために」、『シャラ・トージ』は「じて人は自分の根源をらなければ森にったに同じく」と歴史を語り続ける要を強調したの。

そしてこのような意識は、研究者たちによって元された『モンゴル秘史』が編纂されたのように、17世紀の編年史におけるくの源は民間の声の歴史に由来するものであった。

以上見てきたように、17世紀の四部黄金史の中心思想は「黄金家族」を中心とした国家統一の理想にあった。編年史の著者たちは、この理想を主張するにはチンギス・ハーンの歴史を仏教世で再構成し、そこにチンギス・ハーンの歴史事実より民間で広く伝えられていたチンギス・ハーンの伝説神を大に注入することで、人の記にあった歴史としてのチンギス・ハーンをらせる果を果たしたの。

1 ロシア・ブリヤード共和国のモンゴル学者ツェベン・ジャムツラー (Жамцарано.Ц)は、ラドロフ本の表にある「ハルハトバ」は、ラドロフ本の持ち主だけでなく、著者でもあるとみている。モンゴル国の学者プルライは、「シャラ・トージ」に登場するイリドン・ドグレグチ ([Ildeng dūgüregči]) の子のシャムバダラ・ツォクト・アゲイ ([šambadara čoytu aḡai]) が『シャラ・トージ』の作者であるとみている。モンゴルの学者 Sh.ビラーはこの説を定している。内モンゴルのウリジ(力)は、オルドスのトバ・ジン ([ordus-un tuva jinung]) が著者であるとみている。作者が認できないに、編纂時については、森川哲雄は、18世紀頭くらいに編纂されたとみている。ドイツのハイシシは、1651-1662年に書かれ、17世紀か18世紀初に内容がされ、編集が加えられたとみている。ソ連のシャスティナは17世紀の半ばから後半にかけて書かれたとみているし、またウリジは1643-1662の間に書かれたとしている。

2 ツェベン・ジャムツラーは、1721年、ソ連のプチフスキ、シャスティナとモンゴル国のプルライは17世紀の初頭から後半、モンゴル国の Sh.ビラーは17世紀後半から18世紀の初頭まで、また内モンゴルの金は1628-1634年、チイジ()は1655年に書かれたとみている。

森川哲雄は、第3行の「 [aqui yeke ulus jalγan üjetükei kemen kičiyen bičigulugsen teguber] 」における「アグオイ・イエ・オルス」を「広大なる大国」

と訳したが、ここでの「オルス」は「国家」ではなく、「国民 人民」を している。つまり、の人民が代 に引き いで読 できれと で書かせたという意味である。

『シャラ・トージ』では、リグダン・ハーンが 13 で即位し、マイダリ法王から を受け、大いにブッダの教えを広め、『ガンジ ル』（大 経）をモンゴル語に訳し「 明なるチンギス・タイミン=セチェン・ の勝利神・チャクラバルティン・ 天の主、人間世 の皇帝、金輪を す法王」の称号を有し、政と教の二つの ソを大いに興隆させたと記されている。

チャハル・トゥメンはハーンが いる集 である。

『モンゴル秘史』に かれた、チンギス・ハーンが くなったあと、 体を せてモンゴルの に けた を している。

エジェン（[ejen]）エジェンは主、皇帝という意味であるが、「エジェン」と一文字 けで う時はチンギス・ハーンを す。

い（[čaγan ger]）は、チンギス・ハーンを った「 (□□□□□□ □□□□ □□□) [naiman čaγan ger]」を している。チンギス・ハーンのか、ハーンたちは即位や かの大きな行事を行う際に ず「 」の前で 式を行った。

『元史』「 伝十一」の、「塔塔統 」のく りに「塔塔統 、 人 。 、 論、 本国文字。（タタトンガ、ウイグル人、 くかつ 論に じ、本国（モンゴル）の文字に している）」（『元史』中 書 1976年版、p3048）とある。18世紀に書かれたラマ僧メルゲンゲン・ロブサンダンビジャルサンの『アルタン・トブチ』に1204年にナイマン国との 争でタタトンガは まり、チンギス・ハーン の のハサルがタタトンガから学 と記録している（メルゲンゲゲン『アルタン・トブチ』p60-1）。

1 ビタ・オルス（ ）ということばは、モンゴルの歴史經典によくみられる。サガン・セチェンの『蒙古源流』では、写本によって「バタ」、「ビタ」とあるが書き写す際に発生したものと思われる。18世紀以 の歴史書『ガンガイん・オルスハル』、インジャナシの『 史』では、チベット語の発 で「ビタ」と読むことが強調されている。ソ連の学者 N.P.シャスティナは、漢 歴史書における「北 」という 葉がチベット語でビタになったと した（N.P.シャスティナ 1957）。

1 1

《10r》
（《

1 2

《10r》
（《

1 グ（[‘phags pa] 1235-80）、チベット仏教サキヤ派 [sa skya] の第四大 であり、漢語では発思巴、 思巴、 合思 などと表記される。10 で出家し、 のサキヤ・バンディダ・グンガジャルサンとともに の 省にあるシャラ・タラー（州）に き、オゴディ・ハーンの子クデンに い、1260年にフビライ

の即位後、国に封じられる。1269年にフビライの命で、「グバ文字」と呼ばれた新しい文字を作り、大宝法王の称号をえられる。1276年にサガ法王に命され、1280年にする。

¹ 僧：()アサンキヤ[asaṃkhyā, asaṃkhyeya]の訳で、数えることができないという意。数、数ともう。インドの数の一つで、限の数をう(中元『仏教典「僧」の参照。信書1988)。

1

(40-1

¹ [jīwanggirid]は、仏教用語「記」であり、サンスクリット語の[vyākaraṇa]であり、仏が子の来の成仏についてすることをす。が去生世に仏から記され、がから記されたことが仏典に記録されている(中元『仏教典』参照)。小林高四郎は、『蒙古黄金史』の翻訳において、この葉を「」と訳した。小林高四郎は、「Yivanggriid (Yivanggeliの数)、世主を意味するギリシア語」であるとした(小林高四郎1939、p18)。

¹ 提サンスクリット語ジャンブードゥイー [Jambu-dvīpa]の訳。のに位置する四大の一つで、16の大国、500の中国、10の小国があり、民が受けるしみは東、北の2にるが、諸仏が現れてその法を受けるのはこのけであるといわれる。北に広くにいで、7由あるといわれ、インドのをしたものが後にはこの人間世をうようになった(中元『仏教典「提」の参照。信書1988。)

¹ 業(1982)「蒙古秘史流考」『中国元史研究』1982年第二。

¹ ラシード・ウッディンは「扈国状況的異合説(この国()の状況にする大ボルド・アハはう)」と呼でいる(ラシード・ウッディン1983c、p320)。「アハ」はモンゴル語で「」を意味する。チンギス・ハーン以のモンゴルの中国における活についての部分は、ボルドが大きく献した。

2

《 35 》

2 1

《 43 》

^{2 2} 日本語訳は岡和訳『蒙古源流』から引用しているが、メルゲン・バートルが内モンゴルで出版したアラク・スルデ本には「ミサリというの」()

である。の漢訳本、清朝 隆訳本『蒙古源流』はいずれも「薩」（ミサリという名のの）である。版本のによるか、なども考えられる。² はモンゴルの国家であった「チンギス・ハーン」のをって来たオルドス部で現 調査を行い、チンギス・ハーンに関する文字記録とを収集し、その全体を再構成することをみている。詳しくは『チンギス・ハーン みとしての歴史人 学的再構成』を参照。